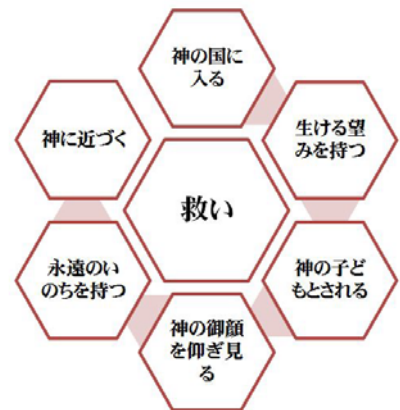


「御国」と関連するヘブリス的諸概念

ベレーシート

●パウロは「御国の福音を宣べ伝える」ことを「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいた」(使徒 20:27)と言い換えています。神のご計画の全体をパウロはどのように理解し、知らせたのでしょうか。そのために、「御国」と関連するヘブリス的諸概念を取り上げていきたいと思ひます。

●ある一つのことばを別のことばに言い換えて表現する「**パラレリズム**」というユダヤの修辞法があります。詩篇の中にこのパラレリズムがあることが発見され、その重要性に気づいたのは 18 世紀半ばになってからのことだと言われます。しかもこの「パラレリズム」は単なる文節の域を越えて、旧約思想の本質を提示するために不可欠な修辞法なのです。旧約のみならず、新約聖書にあるユダヤ人が書いた福音書、そして手紙の中にもその修辞法が用いられています。例えば、右の図は「救い」についての同義的パラレリズムです。すべてユダヤ人(イエシュア、マタイ、マルコ、ペテロ、パウロ)による表現なのです。



—(例)「救いのパラレリズム」—

●この修辞法は事柄の本質をよく理解した者でなければ使えない技法なのかもしれません。使徒パウロはこの「言い換え」(パラレリズム)の達人とも言えます。彼は「御国の福音」を「**光**」、「**神の知恵**」、「**神の栄光**」といった概念で表しています。これら三つに共通する特徴は、

- ① 天地創造の前から存在するものであること。
- ② いずれも目に見えない根源的事柄だということ。
- ③ これら三つの概念を結びつけている方こそ、神の御子であるイエシュアだということ。

●セッションのタイトルを、「『御国』と関連するヘブリス的諸概念」としていますが、今回は、時間的な制約から、最初の「光」だけを取り上げて説明したいと思ひます。

1. やみの中から神によって呼び出された「光」

●ところで、「光」を表わすヘブリス語は「オール」(אור)、ギリシア語は「フォース」(φῶς)です。旧約の「オール」は名詞で 200 回、一方、新約の「フォース」は 74 回使われています。「光」ということばを聞いて、すぐに思い起こす聖句は何でしょうか。いくつか有名な箇所を挙げてみましょう。

セッション 2

- ①「わたしは、世の光です。」(ヨハネ 8:12, 9:5)
- ②「あなたがたは、世界の光です。」(マタイ 5:14)
- ③「ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼(パウロ)を巡り照らした。」(使徒 9:3)
- ④「以前は暗やみでしたが、今は、主にあつて、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(エペソ 5:8)
- ⑤「神は光であつて、神のうちには暗いところが少しもない。」(Iヨハネ 1:5)
- ⑥「すべての良い贈り物・・・は上から来るのであつて、光を造られた父から下るのです。」(ヤコブ 1:17)
- ⑦「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」(詩篇 119:105)

●「光」に関する聖句をいくつか並べてみましたが、これだけでは聖書が意味する「光」の概念を説明することはできません。「世の光」とはどういうことか。「天からの光」とは、「光の子ども」とは、「神が光である」とは、・・・何となく分かるようで分かりません。なぜ分からないのかと言えば、神の「光」は目には見えない光だからです。それゆえ人はこの光を理解することができず、それを拒絶してしまうのです。そこで、「天からの光」に照らされたパウロ(後の使徒パウロ)が、この「光」をどのように解釈し、理解したのかを取り上げてみたいと思います。

(1) パウロを照らした「天からの光」

●パウロはダマスコへの途上で突然「天からの光」に照らされました(使徒 9 章参照)。その「天からの光」によって彼は目が見えなくなりました。三日の間、暗闇の中で、また一切の飲食も絶つて、彼は自分に起こった出来事を思い巡らすことを余儀なくされました。そして三日の後に、主から遣わされたアナニヤという弟子が訪ねて来てパウロの頭に手を置いて祈つた時、彼の目からうろこのような物が落ちて目が見えるようになったのでした。「目が見えるようになった」というのは、単に肉体的な視力が回復したことだけを意味しません。彼が熱心に迫害してきたイエシュアこそ、キリスト(メシア)であるということを聖書から論証できるほどに、彼の霊の目が開かれたことを意味します。言い換えるなら、キリストにある神のご計画(みこころ、御旨、目的)のすべてが、彼のうちにおいて整理し直されたことを意味します。たとえ三日間でも、それは私たちの何十年分に相当する経験であつたと言えます。驚くべきことは、その三日間の経験を通して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせるほどまでになつたということです。何が彼をそのように変えたのでしょうか。それは「天からの光」です。この「天からの光」が、神によってすでに定められている永遠のご計画を、彼のうちに理解させ、悟らせたということなのです。

(2) パウロが理解した「光」の概念

●コリント人への手紙第二の 4 章 6 節で、パウロは創世記 1 章 3 節にある「光」(「オール」אוֹר)を解釈(ミドゥラーシュ)して、『光が、やみの中から輝き出よ』と言われた神』と表現しています。パウロは、創世記 1 章 3 節のみことばをそのままではなく、その箇所を解釈して語っているのです。つまり、「光が、やみの中から輝き出よ」の「やみの中から」という部分が重要な点なのです。つまり、すでにあつた光を、神が

セッション 2

やみの中から呼び出しているということです。このことは、神が「光よ。あれ」と命令したことによって、初めて光が創造されたのではないということの意味しているのです。LXX(七十人)訳は「あれ」を命令形に訳していますが、パウロは未来形で記しています。それはパウロがヘブル語の原文を基にしているからです。このことをヘブル語の文法から説明したいと思います。ヘブル語で書かれた創世記 1 章 3 節は、以下のよう
に記されています(ヘブル語は右から、「ヴァッヨメル・エローヒム・イエヒー・オール・ヴァイエヒー・
オール」と読みます)。

オール ヴァイエヒー オール イエヒー エローヒム ヴァッヨメル

וַיִּמְרָ אֱלֹהִים יְהִי אוֹר וַיְהִי אוֹר

光があった すると 「光 あれ」 神は 言われた そのとき

●ここで「イエヒー・オール」という部分には、「ある」を意味する動詞の「ハーヤー」(הָיָה)と「光」を意味する名詞の「オール」(אוֹר)が並んでいます。重要なことは、動詞の「イエヒー」が命令形ではなく、未完形(指示形)3人称男性単数であるということです。つまり、「あれ」という命令形ではなく、「そうあるように」と神が指示しているということです。新改訳第二版の「光よ。あれ。」という訳が、改訂第三版では「光があれ」と改訳されているのはそうした微妙な含みがあると思われま。しかし、日本語の訳語は「命令」も「指示」も同じく感じられてしまいます。とはいえ、ニュアンスが異なるのだということを知っておくことが、この箇所を理解する上でとても重要です。ちなみに、その後続く「ヴァイエヒー・オール」の「ヴァイエヒー」(וַיְהִי אוֹר)は、ヴァヴ継続法(接続詞+未完形)で、神が「指示した通りになった」という完了形の意味です。ちなみに、Ⅱコリント 4 章 6 節では『「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神」と訳されていますが、「輝き出よ」と訳された部分のギリシア語は命令形ではなく、未来形になっています。おそらくヘブル語の原文が未完形だからと考えられます。ですから、ここは LXX 訳のように命令形ではなく、指示的なニュアンスで、『「光が、やみの中から輝き出るように」と言われた神」と訳することもできるのです。

●「光」が神によって呼び出されたとするならば、その「光」はそれまでどこにあったのでしょうか。答えは「やみの中」です。このように理解することで、「光」の持つ概念がはじめて理解できるようになります。「やみの中から呼び出された光」、これが創世記 1 章 3 節の意味する「光」であり、光源としての光ではなく、創造者である神とすべての被造物とのかかわりにおいて、あらかじめ定められていた「神のご計画としての光」なのです。

(3) パウロのいう「奥義」(「ムステリオン」μυστήριον)と「光」の関連性

●パウロは余すところなく「御国」について語ることでできた人ですが、その「御国」は「隠されてきた奥義」でもあります。「奥義」とは「隠されている事柄」を意味することばですが、このことばが新約で最初に登場するマタイの福音書 13 章 11 節では「天の御国の奥義」とあります(マルコ 4:11、およびルカ 8:10 では「神の国の奥義」)。イエシュアは大ぜいの群衆に対して、「御国の奥義」をたとえて語られました。

セッション 2

すると弟子たちが、イエシュアに「なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。」と尋ねます。これは「思いの外、先生がたとえで語ってくれたおかげで、とてもわかりやすい話で良かったですよ」という意味ではありません。むしろ、「たとえ話では、言わんとすることが群衆にはよく伝わらなかったのでは?」と進言しようとしたのだと思います。そこでイエシュアは弟子たちに向かってこう言われました。「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。」と。なんと不思議な答えでしょう。イエシュアが語るたとえ話の目的は、永遠の昔から天の御国の奥義を知ることが許されている者とそうでない者とを区別するためだということなのです。つまり、「わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。」という言い方で、区別がなされることを語ったのです。その区別とは、真に見るべきものを見ようとせず、また、真に聞くべきことを聞こうとせず、悟るべきことを悟ろうとしないことが明らかにされることであり、そのために「たとえ話」で語っているということをイエシュアは弟子たちに教えられたのです。ここで、「見るべきもの」「聞くべきこと」「悟るべきこと」とは、実は、神のご計画を意味する「光」のことなのです。

●「奥義」ということばは新約聖書では 28 回使われていますが、そのうちの 21 回はすべて使徒パウロが使っています。彼のいう「奥義」とは、「御国」(あるいは「御国の福音」)のことであり、それは「やみの中から呼び出された光」のことです。その「光」のことを説明するのに、パウロがいろいろな語彙によって言い換えているのを彼の手紙によって知ることができます。特に、エペソ人への手紙 1 章 1~14 節がまさにそうです。そこには「光」ということばがなくとも、他のことばによってそれが表現されているのです。この箇所は神の栄光をほめたたえる賛美の源泉について、パウロが極めて簡潔に記した驚くべき箇所です。神があらかじめ定めておられたご計画と目的があったことを記しています。ちなみにこの箇所は、主にある「成熟した者たち」向けのテキスト(「堅い食物」)であり、私たちの信仰の知識の成熟度は、この箇所に対する理解の程度によって計られると言っても過言ではありません。

【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 1 章 1~14 節

- ① †のある箇所は第 3 版で改訂された部分です。()内は私の説明です。
- ② この手紙にある「**聖徒たち**」「**私たち**」「**あなたがた**」とは、「教会」(=キリストの花嫁)と同義です。
- ③ **黄色のマーカー**は、神が世界の基の置かれる前から、あらかじめ定めていたご計画の意志決定を表わす語彙で、「**みこころ**」「**みむね**」「**ご計画**」「**目的**」といった語彙が含まれます。

- 1 神の**みこころ**(「セレーマ」 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\eta\mu\alpha$)によるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。
- 2 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。
- † 3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。
- † 4 すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。

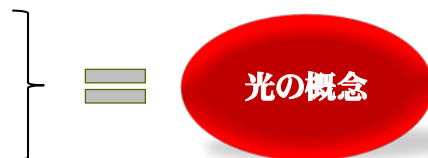
セッション 2

- †5 神は、**みむね**(「ユードキア」 εὐδοκία)と**みこころ**(「セレーマ」 θέλημα)のままに、私たちがイエス・キリストによってご自分の子(=「養子」)にしようと、愛をもって**あらかじめ定められました**(「プロオリゾー」 προορίζω)。
- †6 それは、神がその愛する方であって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。
- †7 この方であって私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。
- †8 この恵みを、神は私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、
- †9 **みこころ**の奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、この方であって神が**あらかじめお立てになった**(発案してくださった=「プロティセマイ」 προτίθεμαι)**みむね**(「ユードキア」 εὐδοκία)によることであり、
- †10 時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方であって、一つに集められるのです。
- †11 この方であって私たちは**御国を受け継ぐ**者ともなりました。**みこころ**により**ご計画**(「プロセシス」 πρόθεσις)のままをみな行方**目的**(=意志「ブーレー」 βουλή)に従って、私たちは**あらかじめこのように定められていた**(「プロオリゾー」 προορίζω)のです。
- †12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。
- †13 この方であってあなたがたもまた、真理のことは、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。
- †14 聖霊は私たちが**御国を受け継ぐ**こと(=相続財産)の保証(=手付金)です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

●ここには重要なことばが数多くあります。その中で最も重要なのは、「**あらかじめ定められていた**」(=世界の基の置かれる前から)というフレーズです。「**あらかじめ定められていた**」と訳された「プロオリゾー」(προορίζω)は新約聖書で6回(使徒4:28、ローマ8:29、30、Iコリント2:7、エペソ1:5、11)だけですが、目を通しておくべき重要な箇所です。



「あらかじめ定められていた」
 「隠された神の奥義」「みこころ」「みむね」「ご計画」「目的」
 「御国を受け継ぐ」



●ところで、何が「あらかじめ定められていたのか」と言えば、それは神の「みこころ」として、神の「みむね」として、神の「ご計画」として、神の「目的」として定められていた、神の「隠された奥義」としての事柄です。しかもその奥義は、神が御子キリストにあって、キリストを通して、キリストのためになそうと定められる事柄です。これが「光」ということばの概念です。ちなみに、ヘブル語では「ご計画」(「エーツァー」 הַצֵּלָה)、「みこころ」(「ヘーフェツ」 חֶפְצִי)、「御旨」(「ラーツォーン」 רְצוֹן)、「目的」(「マハ

セッション 2

シャールヴァー」(מִתְשַׁבֵּה)です。

●このように、エペソ人への手紙 1 章には「光」という語彙は一度も使われていませんが、創世記 1 章 3 節の「光」の概念について語られています。使徒パウロがエペソの教会に対して「神のご計画の全体を、余すところなく」知らせた(使徒 20:27)というその内容は、まさに創世記 1 章 3 節の「光」(אור)についての注解とも言えるのです。「天からの光」による啓示によって、はじめてサウロ(=「シャールヴァール」שָׂאוּלは「神を熱心に尋ね求める者」のヘブル的な意味)は真のサウロとなり、そのことによって彼は「余すところなく御国の福音を論証する」ことができたのだとすれば、「天からの光」、つまり「啓示の光」「悟りと知恵の光」は、私たちにとっても不可欠な光と言えます。

●使徒パウロはエペソの聖徒たちに、「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(5 章 8 節)と語っています。ここでの「光の子ども」とは、「明るく、元気で、生き活きと」という意味でないことは言うまでもありません。「**光の子ども**」とは、**やみの中から呼び出された光、すなわち、神の永遠のご計画、みこころ、みむね、目的について悟った者のこと**です。それゆえ、私たちは主にあって「光の子」とされていることを自覚し、その意味するところを深く悟り、それにふさわしく歩んで、パウロのように「光」についてあかしする(論証する)者となることが求められているのです。

2. 光とやみとを「区別する」ことを良しとされた神

●神によって呼び出された光の正体とは、神が御子を通して、世界の基の置かれる前から、「あらかじめ定めておられた」神のご計画、神のみこころ、神の御旨、神の目的のことだということを理解するだけでも、大変な悟りを得たことになると思います。というのは、この「光」(「オール」אור)について正しく理解することは、本来、私たちの生まれながらの知恵では絶対にできないことだからです。「この世の知恵」ではなく、「神の知恵」が必要なのです。

(1) 「光」と「やみ」との区別

●「光がやみの中から輝くように」と呼び出された神は、「光」と「やみ」とを明確に**区別**することを「良しとされた」ということが創世記 1 章 18 節で強調されています。神はなにゆえに「良しとされた」のでしょうか。光が神によって呼び出される前に、やみはすでに存在していました。

【新改訳改訂第 3 版】創世記 1 章 1～5 節

- 1 初めに、神が天と地を創造した。
- 2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。
- 3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。
- 4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

セッション 2

5 神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

●4節を見ると、「神は光とやみとを区別された。」とあります。「光」はヘブル語で「オール」(אור)、 「やみ」は「ホーシェフ」(חשך)です。神は、「やみ」の存在を認めながらも、「やみ」とは本質的に異なる「光」を登場させ、それを良しとされ、「やみ」と区別されたのです。「区別した」と訳されたヘブル語は「バーダル」(בדל)で、「分ける、分離する」という意味があります。そもそも、なぜ「やみ」がすでに存在しているのかという点については、今回は触れないことにいたします。今回は、光とやみとを「分けられた、区別された」というところに注目したいと思います。この区別に当たって、神は「光を昼と名づけ」、そして「やみを夜と名づけられ」ました。この「**名づける**」という行為は、主権と支配を意味します。

●ところで、光とやみが昼と夜と名づけられましたが、光もやみも私たちの目には見えない現実です。この見えない現実の写しが、第四日目に「二つの大きな光る物」として創造されます。そこに登場する「二つの光る物」とは、光源としての光である「太陽」と「月」のことだと理解できます。光源としての光る物によって、「昼と夜とを区別せよ」とあります。これらは第一日目の、目に見えない「光」と「やみ」が存在していることの写し(コピー)として造られたと考えられます。つまり、目に見えない「光」と「やみ」を目に見える「昼」と「夜」で示すために、神が創造されたのです。これを神学的なことばで表現すると「一般啓示」と言います。

●「一般啓示」ということばと対応するのが、「特別啓示」(御子イエシュア)です。「一般啓示」とは自然や歴史、また人間の存在(男と女)という形を通して現わされている神の啓示です。たとえば、自然において、他とのかかわりをもたないで存在しているものは何一つありません。自然の中にあるすべてが、なんらかのかかわりをもって存在しています。樹木一本にしても然りです。太陽の光と熱、大地、水、そして栄養を摂ることができるように働いている菌根菌の存在があってはじめて、樹木として生きることができるのです。一般啓示としてのこのいのちのつながりは、すべて目に見えない神の世界を表わす写しです。しかしこのことも、神の「光」なしには理解することができません。私たちが自然の中にある驚くべきいのちの仕組みをたとえ知ったとしても、それが神を知ることにつながらないのはそのためです。そこで神は「特別啓示」としてご自身の御子をこの世にお遣わしになり、直接的に神の「光」をあかししようとされたのです。

●「特別啓示」である神の御子イエシュアは、この世を照らす「光」として遣わされました。イエシュアが語り、そしてなされたすべての行為(奇蹟)は、決して行き当たりばったりの事柄ではなく、そのすべてが神の「あらかじめ定められた」ご計画と密接につながっているのです。神が「あらかじめ決めておられる」神のご計画、神のみこころ、神の御旨、神の目的のことを、聖書は「奥義」ということばで言い表していますが、それは決してぶれることなく、神の主権のうちに実現される事柄です。その事柄がやみの世界に置かれることを神は良しとされたのです。ただし、永遠にはありません。やみが永遠に駆逐される時までです。ちなみに、新しい天と新しい地にはやみがありません。

●使徒パウロは主から与えられた使命を以下のように述べています。

セッション 2

【新改訳改訂第3版】使徒の働き 26章 16～18節

- 16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。
- 17 わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。
- 18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中において御国を受け継がせるためである。』

(2) 神の知恵とこの世の知恵との区別

●使徒パウロは「光」の現実と「暗やみ」の現実を表わすために、さまざまな表象を用いています。その最初の表象は、「**神の知恵**」と「**この世の知恵**」です。同じ「知恵」(「ソフィア」σοφία)ということばを用いていたとしても、区別されるべき知恵があるということです。

●コリントの教会は、「私は、〇〇〇〇につく」と言って分派をつくり、分裂を招いていた教会でした。その教会に対してパウロは、自分が神から遣わされたのは、(分派をもたらすような)バプテスマを受けるためではなく、福音を伝えるためであるとし、この福音を伝えるに当たって、「この世の知恵によって」はしないと断言しています。パウロが「知恵」ということばを使うときに、「神の知恵」と「人間の知恵」を明確に区別して語っています。言い換えの名人であるパウロはそれぞれの「知恵」を以下のようにいろいろなことばで言い換えています。

- ①【**神の知恵**】(Iコリント 1:21)・・・「隠された奥義としての神の知恵」(Iコリント 2:7)
- ②【**人間の知恵**】(Iコリント 2:5)・・・「ことばの知恵」(同、1:17)、「この世の知恵」(1:20)、
「自分の知恵」(1:21)、「すぐれたことば」「すぐれた知恵」(2:1)、
「説得力のある知恵のことば」(2:4)

●「すぐれたことば」「すぐれた知恵」(2:1)、「説得力のある知恵のことば」(2:4)—それは結構ではないかと思うかもしれませんが。それらは人間的に見るならば素晴らしい能力であるかのように思います。しかしそれらはすべて「人間の知恵」であるがゆえに、パウロはそのような知恵によって「福音」を語ることはしないとしたのでした。なぜなら、「神の知恵」は「この世の知恵」によっては悟ることができないからです。もし神の知恵をもしこの世の支配者たちが悟っていたなら、栄光の主を十字架につけはしなかったはずだとパウロは述べています。また、「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです」(1:21)と、いわば究め付けとも言えることを述べています。神の知恵は神のすべてのことを知る御霊の助けによってのみ理解できるのです。この御霊は神からの賜物です。この「賜物」について話すのも、人間の知恵によることばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。つまり、「御霊のことばをもって御霊のことを解く」ということばです(2:13)。これは詩篇 36 篇 9 節にある「私たちは、あなたの光のうちに(=光によって)光を見る」というフレーズと同じことを言っているのです。

セッション 2

●パウロは、徹頭徹尾、神を中心とした概念で理解し、そして語るという生き方を貫いています。人間的な概念、人間の経験、価値観、評価によって理解するのではなく、神からの賜物である御霊によって神の世界を知るのです。ですから、御霊を与えられている人は神のすべてのことをわきまえることができますが、自分の知恵によってはだれもわきまえることができないのです。

(3) エデンの園において与えられた人間の本来の務め

●この問題を、より根源的な視点から考えてみたいと思います。そのためには、神の創造の冠として造られた人間アダムに与えられた務めについて注目する必要があります。

【新改訳改訂第3版】創世記 2 章 7～9 節、15～17 節

7 神である【主】は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。

8 神である【主】は東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

9 神である【主】は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。

園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木を生えさせた。

15 神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

16 神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

●ここで質問です。神はなぜエデンの園に、取って食べてはならない「善悪の知識の木」を生えさせたのでしょうか。そのような木をエデンの園に置くことがなければ、人間は罪を犯すことはなかったのに、という思いはありませんか。「人間が罪を犯したのは、そもそも神がそのような木を置いたからだ」と神を弾劾する声が聞こえて来そうです。あなたはどう思いますか。

●ここで特に注目したいのは、15 節にある「耕す」という使命と「守る」という使命を、神がアダムに与えたということです。このことは何を意味するのでしょうか。「食べるのに良いすべての木」が生え、しかも「園のどの木からでも思いのまま食べてよい」とされていたのです。なぜこれ以上、耕す必要があるのでしょうか。何を守る必要があるのでしょうか。しかし神である【主】が「人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた」のには、それなりの理由があったのです。その理由とは何でしょうか。ちなみに、ヘブル語の「エデン」(「エーデン」 עֵדֶן)は、動詞の「アーダン」(אָדַן)に由来します。「アーダン」は「ほしいままに楽しみふける」という意味があります。確かに、エデンの園には「食べるのに良い」ものが豊富にあり、しかも「思いのまま食べてよい」という園ですから、「エデンの園」は贅沢きわまりない豊かな園であったと想像できます。

① 「耕す」という務め

●神がアダムをエデンの園に置かれた目的の第一は、エデンの園を「耕す」ためです。「耕す」と訳された動詞は「アーヴァド」(אָרַב)で、これは後の祭司用語の「仕える」という意味です。つまり、ここでの「耕

す」という意味は、神が与えてくださったエデンの園のすばらしさと豊かさを味わい、さらにそこに隠されている豊かさを掘り起こすという務めです。

②「守る」という務め

●アダムがエデンの園に置かれた目的の第二は、エデンの園を「守る」ためでした。エデンの園というからには、園の内と外があります。3章の最後には罪を犯したアダムとエバがエデンの園から追い出されるということが記されています。つまり、エデンの園を「守る」というのは、区別すべきものを区別するという務めであると考えられます。その証拠に、エデンの園の中央には、食べてよいものと食べてはならないものが区別されていました。しかもその食べてはならないものを食べるとき、必ず「死ぬ」と警告されていたのです。区別すべきことを区別する務めが、ここでは「守る」(「シャーマル」**שָׁמַר**)ということばで表現されているのです。「光」と「やみ」とを明確に**区別する**ことが、創造の最初からの神のみこころであったのですが、アダムはこの務めを正しく認識してはいなかったようです。そこを狡猾なサタンに突かれてしまったのです。サタンの戦略は、いつの時代においても、区別すべきものを混同させ、曖昧にしてしまうことです。

●区別すべきものを区別するという務めは、後のイスラエルの民に、「食べてもよいものと食べてはならないもの」が食物規定として啓示されます(レビ記 11 章)。「食べてもよいもの(動物)」とは、「ひづめが分かれているもの」と「反芻するもの」です。この二つの条件を満たさない動物は汚れたものとされました。実は、この二つの規定はイエシュアを指し示しています。「ひづめが分かれている」というヘブル語は「パラス」(**פָּרָס**)で、「パンを分けて与える」という意味です。「反芻する」というヘブル語は「アーラー」(**עָלָה**)で、本来的には「上る、登る」という意味で、主の山であるエルサレムに上ることをも意味しています。しかも、その動詞の名詞「オーラー」(**עֲלָה**)は、「全焼のいけにえ」を意味します。このように、「ひづめが分かれている」と「反芻する」という二つの条件を満たしているのはイエシュアなのです。したがって、この規定を守らない者は「身を汚す者」とみなされるのです。神である主はこうした食物規定を通して、聖なるものとそうではないものとを区別することを神の民に教えられたのです。エデンの園に、神が「いのちの木」と「善悪の知識の木」とを置いたその意図とは、最初の人であるアダムに「区別する」ことを教えるためであったと言えるのではないのでしょうか。

(4) つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけない

●使徒パウロは神の民に「区別する」(分離する)ことの重要性を教えるために、以下のように記しています。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント 6 章 14～18 節、7 章 1 節

14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。

光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。

16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。

「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。

セッション 2

そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、

18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

7:1 愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。

●「不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。」の「くびき」というのは、具体的には「結婚」のことです。全く違う価値観をもった男女がいっしょに歩むことには無理があるのです。

- ①「正義」と「不法」・・・・・・・・・・そこには、何の**つながり**もない。
- ②「光」と「暗やみ」・・・・・・・・・・そこには、何の**交わり**もない。
- ③「キリスト」と「ベリアル」(※)・・・・・・・・・・そこには、何の**調和**もない。
- ④「信者」と「不信者」・・・・・・・・・・そこには、何の**かかわり**もない。
- ⑤「神の宮」と「偶像」・・・・・・・・・・そこには、何の**一致**もない。

※「ベリアル」とは、ヘブル語の「ベリツヤアル」(בְּרִיאַל)に相当し、「無い」を意味する「ベリー」(בְּרִי)と「価値、有用」を意味する「ヤアル」(יָאֵר)を合成した語彙で、「無益な者」「よこしまな者」と訳されます。新約時代には定冠詞を伴って人格的な意味を持ち、サタンに対する名称とされています。

●ここには、明確に区別されていることがあります。この区別は神が定められたもので、神の民はそれを「守る」という務めがあるのです。それは決してドレッシングのように混ぜ合わせて良しとしてはならない事柄なのです。なぜ一見厳しいと思われるような区別がなされるのでしょうか。それは神と人とが共に住み、歩むためです。ですから、区別が必要なのです。旧約の律法(トーラー)の中に、食べてよいものと食べてはならないものの区別があるのは、神の民に「神のもの」と「この世のもの」とを一緒にしてはならないこと、光とやみが区別されるように、「つり合わないくびきをつけてはならない」ことを教えるためであったのです。

●使徒パウロが警告しているように、明確に区別すべきものを区別することを怠ると、苦い実を食べることになります。もし私たちが神と共に住み、神と共に歩もうと願うならば、区別する務めを、分離すべき務めを、神の知恵によってなさなければならぬのです。なぜなら、私たちは「光の子ども」とされたのですから。